

社説

<2012.4.5>

県立博物館構想

若手学芸員の育成急げ

静岡県は本年度、自然史資料の活用拠点検討事業として県立博物館建設に乗り出す。高校の再編統合で使われなくなる静岡南高(静岡市駿河区)の校舎を改修し、2014年度のオープンを目指す。本年度は約3800万円の予算で、博物館の機能を検討し、設計に着手する。

豪華なハコモノは必要なく、既存施設の活用に異論はない。子供の科学する心を育み、生涯学習の意欲に応える施設を期待する。新時代の博物館像を全国に発信する気構えで取り組んでほしい。そのためにも、博物館行政に詳しい人材の登用や、研究スタッフとして静岡県の自然史に精通した若手学芸員の育成に早期に着手すべきだ。

本県には日本一深い湾である駿河湾と日本一高い富士山があり、変化に富

んだ自然が特徴だ。植物、昆虫、化石、貝類、魚類など、深海から高山まで多様な自然史資料の宝庫といえる。

富士山は活火山であり、地震を引き起こすプレート構造、活断層など地形、地質の面からも研究のフィールドが広がる。専門家は「県土そのものが日本を代表する自然史博物館」と指摘している。

県所有の自然史資料は現在、静岡市清水区にある旧県中部健康福祉センター1分庁舎の一部を転用し、保管されている。11年度までの収集資料は約27万点で、うち8万7213点の評価を終えた。新種標本など、国レベルで特筆すべき貴重な資料が254点、これに準じる資料が2万1584点に上ることが分かった。県立自然史博物館を支える資料群となる。県はさらに、本年度は昆虫など約1万5千点、13年度以

降は植物、魚類など約18万点を収集する方針。収集資料は最終的に50万点近くになる見通しだ。

このような資料を適切に分類、評価しなければ、博物館の土台が揺らぐ。高い専門性が不可欠で、大学などの研究者と連携したい。中学や高校の地学部、生物部などの生徒にボランティア参加を求めてもいい。こうした活動が研究者の育成につながり、新時代の博物館の在り方について意見を集約する場にもなる。

「自然史」は、英語のナチュラリヒストリーの直訳。各地の自然史博物館はほぼ共通して、地球の生い立ちや生命の進化、人間と自然の関わりを、鉱物や化石、標本や復元模型を使って解き明かしている。地球の歴史46億年のスケールでは、大陸さえ移動し、人の一生は一瞬の出来事だ。自然史資料をひもといていけば、巨大地震や大津波は「想定外」でなくなる。自然史博物館はそうした学びの場にしたがい。